
書評・紹介

Jason Powell

Aging, Aging Populations and Welfare

Springer, 2024, 142pp.

本書は、高齢化が個人の幸福、社会福祉制度、そして世界経済に及ぼす影響を論じた1冊である。年金・医療をはじめとする社会福祉の制度・システムや、ソーシャルワーカー・ケアマネージャーなどのケアの専門家、そして自治体やケアコミュニティーに対して、社会理論に基づいた高齢者と社会全体に関する包括的かつ批判的な論考が展開されている。本書は、計9章で構成されている。

1章では序論として、高齢化を捉える上での社会理論の必要性が強調されている。従来の医学生物学的アプローチでは、老化は単なる「衰退」とされていたが、近年の老化・高齢化は権力・不平等・文化といった「社会的側面」の問題と絡んで捉えられることが多くなっていることから、老化を理解するために社会理論の論争と洞察を整理する必要性が述べられている。政治経済学的視点、フェミニズム的視点、ポストモダン的視点から見た老化・高齢化を概説し、それらを統合することで、社会哲学として高齢化を理解することが重要であると主張する。2章では世界各地の高齢化の進行をデータで捉えたうえで、グローバル化が進行する現代では高齢化は国家単位の問題ではなく、世界全体の問題として捉えられるべきであると指摘する。3章ではベヴァリッチ報告から現代に至るまでのイギリスにおける社会福祉の発展が概説されている。4章ではCOVID-19によって高齢化と福祉にどれだけの危機が訪れたのかが説明されている。

5章から9章（最終章）では、高齢化と福祉に関する理論的な考察が行われている。5章ではJudith Butlerのパフォーマティビティ概念を援用し、ソーシャルワーカーの専門職化についての考察がなされている。6章ではコミュニティの概念とその変化について検証し、変化はグローバリゼーションによって引き起こされていると結論づけている。7章ではケアの骨格となる概念として「信頼」をとりあげ、イギリスの事例から、コミュニティケア政策を考察し、ケアマネージャーと利用者グループの間の結びつきがどのようにしてより強固になっていくかを概観している。8章では高齢化と福祉を労働の面から捉え直し、そのリスクについて検討している。特に高齢者の就労期間の延長や私的年金制度の強化について考察されている。最終章となる9章ではグローバリゼーションが進行する現代において、高齢化と福祉がその影響をどのように受けるのかについて理論的な検討がなされている。

本書の特徴として、議論の中でミシェル・フーコーの理論が多く参照され生かされている点がある。例えば4章におけるCOVID-19流行に伴うロックダウン政策やソーシャルディスタンス政策が成立した背景の説明や、5章でのソーシャルワーク実践における服従と抵抗の概念を用いた考察では、生政治(biopolitics)概念やパノプティコン文化に言及しながら、高齢化に伴う社会と個人の変化を理論的に検討している。高齢化に関する議論は、特にケアの実践の場ではえててプラグマティックな議論に依りがちであるが、本書では一貫して社会理論としてどのように捉えることができるかという議論がなされており、フーコー的視点から高齢化社会に関する理論的枠組みを概観する上で一読に値すると思われる。

なお本書は基本的にイギリスや西欧先進国の事例に基づいて執筆されているが、高齢化が著しい国

の例として日本にも言及されている部分があった。そこでは「平均寿命の延伸と85歳以上の人ロ增加に伴い、四世代同居世帯がより一般的になる可能性がある」と予想されている。三世代同居世帯は大幅に減少している中ではあるが、四世代同居世帯に着目する発想が私にとって盲点であったので、興味深い指摘であった。

(南 拓磨)